



自分がガンになったら…、
家族がガンになったとき…。

そんな時のための

“ガン”誌上ワンポイント講座

3人に1人がガンでなくなる時代

死亡者数は交通事故の30倍

罹患者の22%が55才～64歳

(年間30万人以上の方がガンで亡くなる時代)

このような現実をきちんと把握されていますか。ガンはとっても身近な存在なのです。しかし、「自分だけは大丈夫」と多くの方が思っています。「まさか」の時にきちんとした対応ができるように、ラ・ポルテではガンの誌上講座をシリーズでお届けすることにいたしました。講師をしていただくのは、米国国立がん研究所(NCI)にて3年間最先端の研究に従事され、現在佐田病院にてガン医療の専任チームを率いる外科医師中村光成氏です。

ひととはなぜ ガンになるのか？

それは、「ヒトは生きていくからであり、」ヒトが死ぬために「ガンになる」といつてもいいかと思えます。別に哲学的な禅問答をはじめようというのではありません。ごくあたりまえのことですが、ヒトは生きていく限り何らかの原因で死ぬ必要があります。その際、ガンで死ぬということはそんなに悪い選択肢ではないと私自身は考えています。まだ皆さんの中では、「ガンは怖いもの」というイメージがあると思いますが、それを取り除いていくためにも、今回はガンとはどういうものかをお話したいと思っています。

人間の身体は60兆個という数の細胞からできていますが、そのうちのたった一つの細胞が癌化する。ことから、ガンは始まります。個々のガンでかなり差があるので一概にはいえませんが、1個のがん細胞が100万個(0.01g)になるまでには約5年かかります。この時点ではガンを発見することはまだ不可能です。これが2～3年

すると10億個(数g)になり、臨床的に診断することが可能となります。さらに、2～3年もすると1兆個(1kg)にもなってしまうので、こうなると、臨床的には進行癌となることが多く、生命に影響が出てくることになりま。す。いいかえれば、臨床的に認知可能になる時期から進行癌になるまでには数年かかりますから、特殊な場合を除き、少なくとも年一回の検診を受けていれば手遅れになることはないのです。ガン年齢の人には早期発見・早期治療が叫ばれる所以です。

ガン発生の第一歩は 遺伝子の「キズ」から

ヒトに限らず昆虫や植物などのやや高等な多細胞生物のほとんどでガンは発生します。では、なぜ細胞はガン化するのでしょうか？ヒトの身体はたんぱく質で構成されていますが、このたんぱく質を作るための情報(設計図)を納めた物質が遺伝子(DNA)であり、たったひとつの細胞の核の中に、身体をつくるために必要なたんぱ

く質すべての遺伝子が組み込まれています。この遺伝子にキズ(突然変異)がつくことによって細胞に変化が起こります。単なるひとつのキズでは癌化は起こりませんが、遺伝子にこのようなキズが繰り返し付けられ、細胞が分裂するたびにこれらのキズが増幅され蓄積することによって細胞がガン化し、悪性化していくと考えられています。

では、何が遺伝子にキズ(変異)をつけるのでしょうか？次回はこちらについて詳しくお話ししましょう。



profile ■■■■■

中村 光成

(なかむら みつなり)

外科医師・医学博士
奈良県出身
佐賀医科大学卒、九州大学
腫瘍制御学に所属
米国国立がん研究所(NCI)
でガンの研究を行う
現在「緩和外科」医療を実
践する臨床医として活躍
*掲載のデータは厚生労働
省資料/2005年